

秋田県文化財調査報告書第68集

湯元遺跡発掘調査報告書

1980・1

秋田県教育委員会

序

湯元遺跡は秋田県雄勝郡皆瀬村にある縄文時代前期の遺跡である。本遺跡が秋田県土木部の地方道改良工事（湯沢・築館・志津川線）にかかることがわかり、土木部と協議の上、発掘調査後工事を進めることになり、秋田県教育委員会が発掘調査を実施したものである。

この報告書はその調査記録である。調査の結果遺構はなく、遺物も少なかった。しかし、少ない遺物の中に考古資料として貴重なものがあり、今後この地域の研究に欠くことのできないものとなるはずである。

調査は年度頭初の4月～5月におこなったもので現地は寒かったのであるが、地元皆瀬村教育委員会、同村公民館、秋田県土木部雄勝土木事務所の職員ならびに県立湯沢高等学校考古学クラブの生徒達から大変な応援をいただいたことをここに明記して感謝の意を表するものである。

昭和54年12月20日

秋田県教育委員会

教 育 長 畠 山 芳 郎

例 言

1. 本書は、秋田県教育委員会が昭和54年度に実施した湯元遺跡の調査報告書である。

2. 本書の作成にあたり以下のように分担して執筆した。

目次の第1章の第1節……………富樫 泰時

第1章の第2節、第2章の第2節、

第4章、第5章……………畠山 憲司

第2章の第1節、第3章……………橋本 高史

3. 遺跡・遺物の写真撮影は畠山が行った。石器トレース、土器拓本は富樫が行った。

4. 本書中の出土遺物の実測図の縮尺は全て $\frac{1}{2}$ に統一した。出土遺物の写真の縮尺も全て $\frac{1}{2}$ に統一した。全体図は任意の縮尺であり、スケールを付した。方位は全て磁北である。

5. 石質の鑑定は、秋田県立博物館学芸主事渡部晟氏にお願いした。

目 次

序

第1章 はじめに.....	1
第1節 発掘調査に至るまで.....	1
第2節 調査の組織と構成.....	1
第2章 遺跡の立地と環境.....	3
第1節 立地と環境.....	3
第2節 周辺の遺跡.....	3
第3章 発掘調査の概要.....	3
第1節 遺跡の概観.....	3
1. 遺跡の層序.....	3
2. 遺物の出土状況.....	5
第2節 調査の方法.....	5
第3節 調査の経過.....	5
第4章 調査の記録.....	7
第1節 出土遺物.....	7
1. 土器.....	7
2. 石器.....	10
第2節 周辺遺跡とその採集遺物.....	12
1. No.1 遺跡.....	12
2. No.2 遺跡.....	12
3. No.3 遺跡.....	14
4. No.4 遺跡.....	14
5. No.5 遺跡.....	14
6. No.6 遺跡.....	14
7. No.7 遺跡.....	14
第5章 まとめ.....	16

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	4
第2図 調査区全体図	6
第3図 出土土器（1）	8
第4図 出土土器（2）	9
第5図 出土土器（3）	10
第6図 出土石器	11
第7図 No.2, No.6 遺跡採集土器	12
第8図 No.1～No.6 遺跡採集石器	13
第9図 No.7 遺跡採集石器	14

表 目 次

第1表 湯元遺跡出土石器計測一覧表	15
第2表 No.1～No.6 遺跡採集石器計測一覧表	15

図 版 目 次

図版1 遺跡遠景・遺跡全景	
図版2 遺跡近景・地層断面	
図版3 発掘風景・発掘状況	
図版4 湯元遺跡出土土器	
図版5 湯元遺跡出土土器・湯元遺跡出土石器	
図版6 No.1～No.7 遺跡採集土器・No.1～No.6 遺跡採集石器	
図版7 No.7 遺跡採集石器	

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至るまで

昭和52年度に文化財保護指導員を委嘱した山田貞吉、鈴木俊男氏から、雄勝郡皆瀬村より宮城県に通じる県道沿いにいくつかの遺跡がある旨、通知があった。秋田県土木部では、地方道改良工事の一つとして「県道、湯沢・築館・志津川線」を計画し、遺跡のある皆瀬村大湯地区 1,640mの工事は、昭和57年度完成の予定で進められることになった。

昭和53年4月、雄勝土木事務所道路課から工事予定地区内に遺跡が存在するか否か調査してほしい旨連絡があり、昭和53年4月20日、文化課富樫が現地調査を行った。調査には、皆瀬村教育委員会教育長沓沢忠生氏、同村公民館長伊藤寅之助氏、それに雄勝土木事務所道路課技師伊勢礼晴氏が同行した。現地は雪が残っており、地上での観察は不可能に近かったが、幸い近くに露頭があり、その断面から縄文時代前期の土器片、それに落込みのあることがわかり（調査の結果は新しい時代のものであった）、遺跡の所在することがわかった。加えて、工事計画路線全体の調査が必要であることを話したのである。

昭和53年5月16日付で、雄勝土木事務所長から文化課長あて、全線の調査依頼文書が提出された。同年5月23日、雄勝土木事務所道路課技師伊勢礼晴氏他三氏の案内で、富樫が計画路線上を一部坪堀りしながら、調査を実施した。その結果、4月20日に確認した湯元遺跡以外には遺跡が存在しないことが明らかになったのである。このことを昭和53年5月26日付で、雄勝土木事務所長あてに文書で回答した。それは、湯元遺跡の発掘調査が必要であること、発掘面積は約400m²であること、調査期間は2週間程度でよいこと、などの内容のものであった。

その後、土木部道路課及び雄勝土木事務所と協議を重ね、昭和54年4月から5月にかけて、次項により発掘調査を実施することになったものである。発掘調査実施前の昭和54年4月10日調査担当者にあたる畠山憲司社会教育主事、橋本高史文化財主事を現地に案内し、地元の皆瀬村教育委員会に協力依頼のお願いをし、いろいろな打合せを行った。この年は前年より雪が少なく、遺跡のある台地は雪が消え、ところどころにカタクリの花の咲いていたのが印象的であった。

第2節 調査の組織と構成

調査目的 県道（湯沢・築館・志津川線）改良工事に伴い消滅する湯元遺跡の一部を工事に先立って発掘調査し、その記録保存をはかり、地域社会での埋蔵文化財の活用に資する。

調査主体者 秋田県教育委員会

調査担当者 畠山憲司, 橋本高史 (秋田県教育庁文化課)
調査員 遠藤博通 (県立湯沢高等学校教諭)
調査協力機関 秋田県雄勝土木事務所道路課
皆瀬村教育委員会
県立湯沢高等学校考古学クラブ
遺跡の所在地 秋田県雄勝郡皆瀬村畑等字小湯の上79番地
調査期間 昭和54年4月16日～5月2日
調査対象面積 1,500m²
調査面積 550m²
発掘調査協力者 阿部喜作, 阿部誠策, 伊藤朝五郎, 伊藤養助, 佐藤茂, 高橋春吉, 藤原良一,
阿部カツエ, 阿部孝子, 石田京子, 伊藤ヒサ子, 木村精子, 伊藤アサノ, 佐藤
ツエ, 佐藤ヨシ, 佐藤トヨ, 藤原タツノ, 藤原アヤ
遺物整理協力者 佐藤和弘, 渡部健太郎, 桑原隆, 高橋浩樹, 大石俊雄, 小町順子, 牧野一枝,
金子千賀子, 小渕悌子, 天野恵子

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 立地と環境

雄物川水系の皆瀬川は、栗駒山麓にその源を発し、険しい山あいの中を北流する。このため皆瀬川の上流部は深いV字谷になっており、蛇行しながら両岸に河岸段丘を形成する。この河岸段丘上には稻川町から皆瀬村にかけて周知の遺跡も多い。湯元遺跡はその最上流南側段丘上に位置し、標高約355m、現河水面との比高差は約15~20mである。

本遺跡は栗駒国定公園内、著名な小安温泉郷上流にあり、ほぼ山林と原野、西側の一部がキャンプ場になっていた。もともとの遺跡の広さは約5,000m²程あったと推定されるが、北側^{2/3}は県道工事のため破壊されてしまい、残った遺跡の面積は約1,500m²で、これを調査対象面積とした。この範囲内はほとんどが湿原を含む原野であり、さらに西側はキャンプ場造成の際、破壊されてしまっていた。

第2節 周辺の遺跡

皆瀬川流域に存在する周知の遺跡は多いが、その上~中流域にかけては調査が不十分で、未発見の遺跡が大分あるようである。このことは今回行った表面採集による踏査でも明らかである。すなわち、第1図に示した遺跡のうち湯元遺跡以外はこれまで知られていなかったものばかりである。これら新たに発見された7遺跡のうち、No.6とした遺跡には縄文早期後葉に位置づけられる土器があり、推定遺跡面積も約5,000m²で湯元遺跡との関連も考えられなければならない。

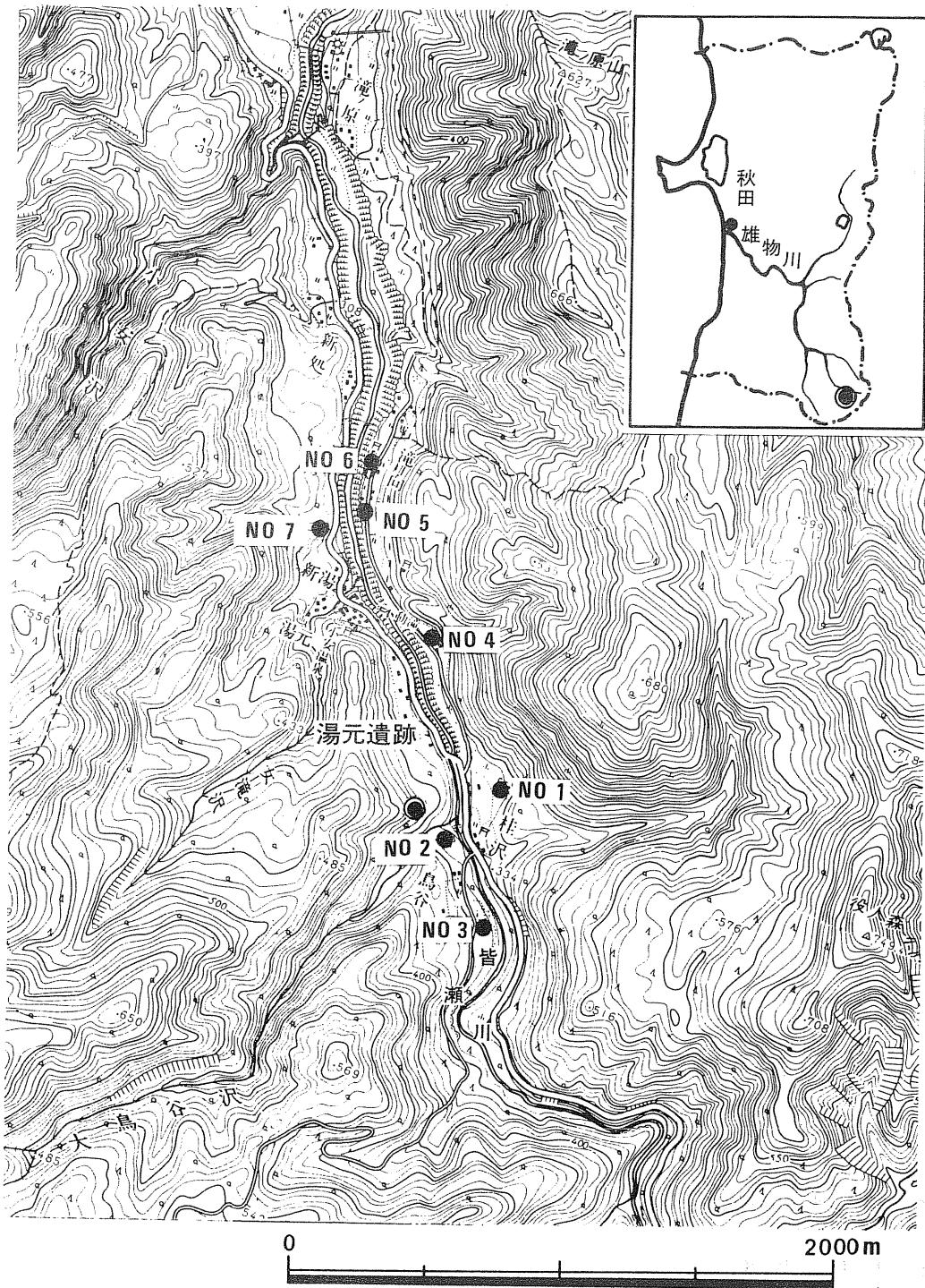
また、今回の踏査はたった1回だけのもので、範囲もせまく、時期不明のものが多い。これが今後計画的に踏査あるいは発掘調査されれば、縄文期あるいは、それ以降の山間渓谷周辺の当時の様相が明らかにされるものと思われる。

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

1. 遺跡の層序

遺跡は皆瀬川の河岸段丘上に位置し、ゆるやかに北側に傾斜している。西側がキャンプ場として利用されているが、今回の調査区域は大部分が山林・原野である。各層は地点により欠如するもの



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

もあるが、ほぼ中心部では以下のようになる。

第Ⅰ層 黒褐色土 いわゆる表土できめの細かいくろぼく土。 (20cm)

第Ⅱ層 暗褐色土 小礫を含み、部分的にかなり多量に含むところもある。 (20cm)

第Ⅲ層 黒褐色土 薄く帶状に分布するが、欠如している部分もある。粘性のあるややしまった土。 (10cm)

第Ⅳ層 黄褐色土 遺物包含層。黄褐色土をベースに、黒～暗褐色土が斑点状に混入する。
(10cm)

第Ⅴ層 黄褐色土 地山、段丘礫層。

2. 遺物の出土状況

今回の調査で出土した遺物はコンテナ半箱分と少なく、繩文式土器、打製石斧等に分けられる。遺物のほとんどは第Ⅳ層と第Ⅴ層の境付近から、まとまりなく断片的に出土した。また、地域でいうと、北東部つまり台地縁辺部とその斜面からのものが大部分であった。

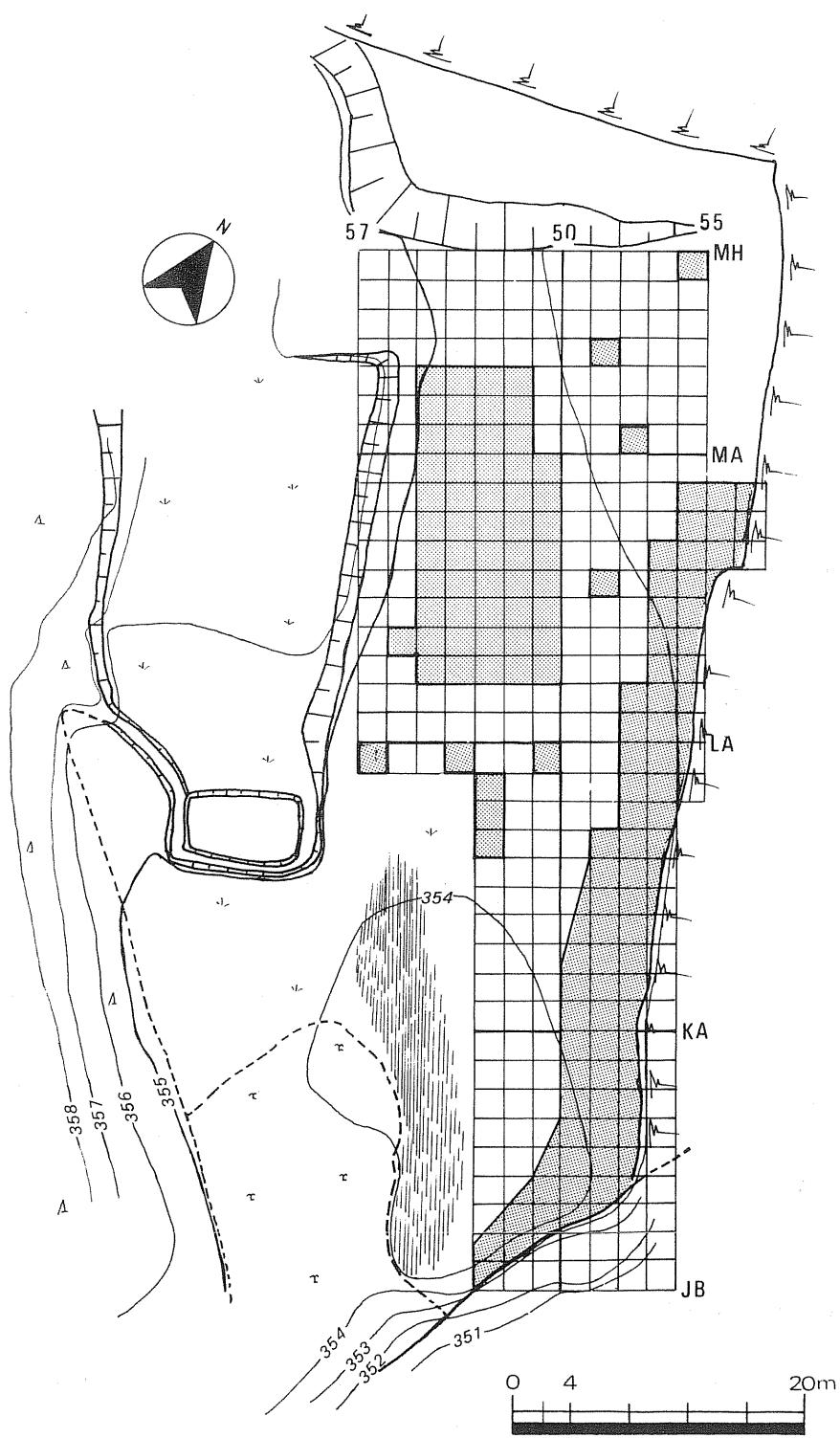
第2節 調査の方法

湯元遺跡はもともとは台地部分約 5,000m²あったと推定されるが、北側^{2/3}は県道改良工事に伴う事前の工事で破壊されてしまった。また東側には湿地となっている部分があるので、それらを除いた残りの道路予定地の南端までのほぼ全域 1,500m²を調査対象として行った。

遺跡北西部に任意の基準杭を打ち、これを原点 (MA50)とした。道路予定中央線をほぼ東西とみなし東西南北の基線を決定した。これから 2 m 毎に東西基線はアルファベット 2 文字の組み合わせ、南北基線は 2 衍の数字の組み合わせを用いた。すなわち、東西基線は 10 グリッド 20m で 2 文字の先の方を替え、2 m 毎に後の方を替えた (西へ MA, MB …… MJ, NA …… NJ, OA ……)。また、南北基線の数字は 2 m 毎に北へ行くと 1 ずつ増えることとした (北へ 50, 51, 52 …… 59, 60 ……)。各グリッドの名称は、東南隅の交点のアルファベットと数字の 4 個の組み合わせを用いることにした (MA50, MA51, MB50, MB51 ……)。

第3節 調査の経過

湯元遺跡は昭和53年度に、県道改良工事に伴って発見された遺跡である。発掘調査は昭和54年4月16日から5月2日にわたるべ15日間にわたって行われたが、2 m × 2 m のグリッド法により随時拡張していく方法をとった。調査の全般的な経過は次のとおりである。



第2図 調査区全体図

4月16日にバックホーによる立木等の除去を行い、18日まで発掘調査の準備を整え、19日から発掘作業を開始した。28日まで拡張及び掘り下げを行ったが、遺物が出土したのは東側の台地縁辺部とその斜面で、特にJ E51では縄文前期前葉の土器が出土した。遺構は検出されず、表土を剥いだ段階で黒色の落ちこみがあり、土塙等の遺構かと思われたものは、キャンプ時の空カン、ゴミ等を埋めた穴等であった。

29日には周辺の表面採集による踏査を湯沢高等学校考古学クラブ生徒と伴に行い、7ヵ所から遺物を採集した。（第1図）

5月2日にテント、器材等の搬出をし、湯元遺跡発掘調査を終了した。

第4章 調査の記録

第1節 出土遺物

これまで述べてきたように、本来遺跡の中心部と思われるところは既に工事に伴う造成等で全く破壊されてしまっていたため、結果的には湯元遺跡の南東端部の調査になってしまった。この部分は一部湿地とキャンプ場であったため、遺構は全くなく、調査区南東端とその斜面から、大きな火山性の石の間に混じって縄文時代前期の遺物を若干検出したにすぎなかった。

1. 土器（第3, 4, 5図 図版）

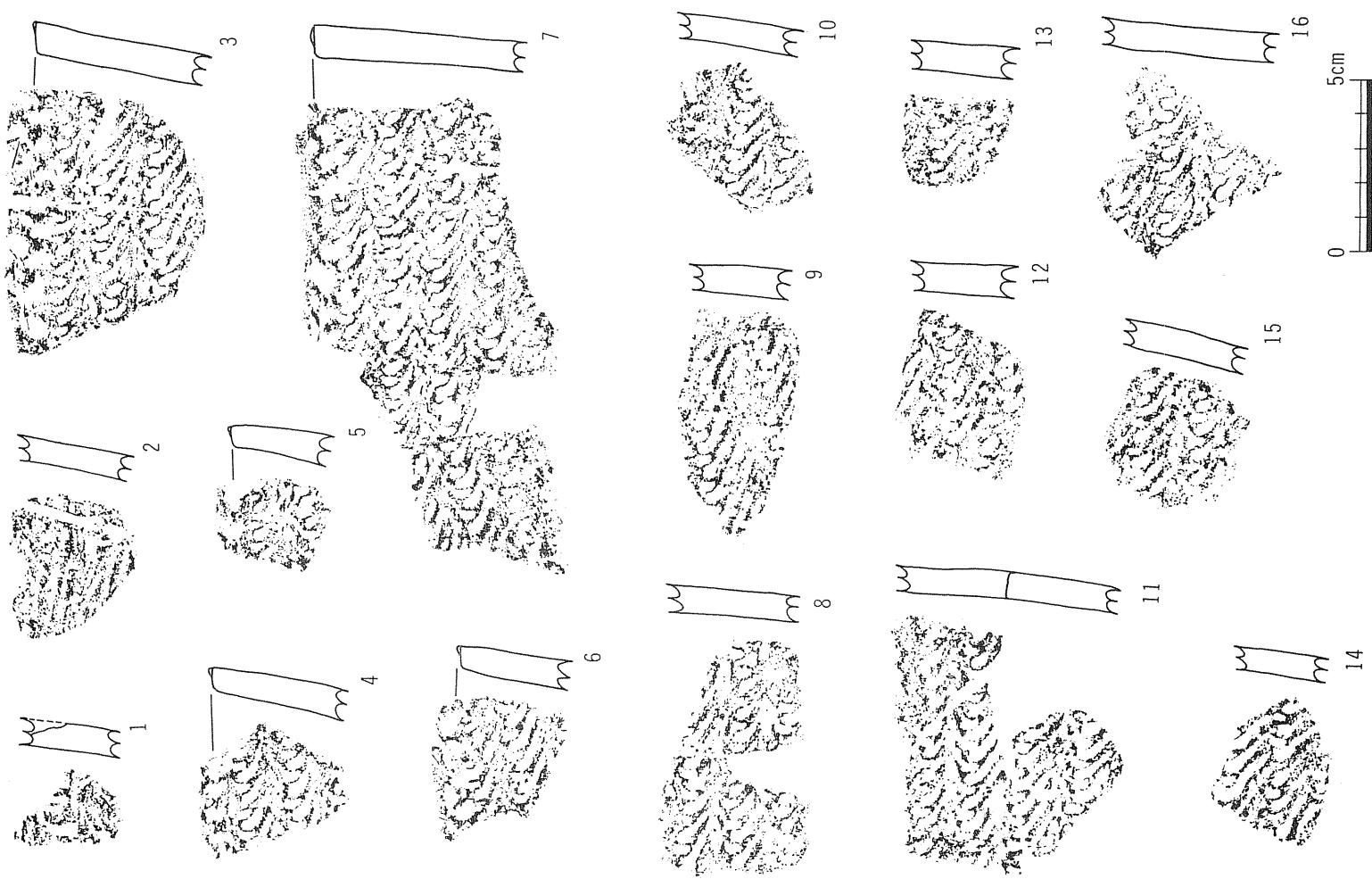
発掘調査で出土した土器は全て破片であり、その総破片数も約80片と少ない。この中では、蓋と思われる時期不明のもの1点を除いて、全て縄文時代早期後半～前期前半に位置づけられ、第3図1, 2, 第4図29～31を除くと同一個体のものである。

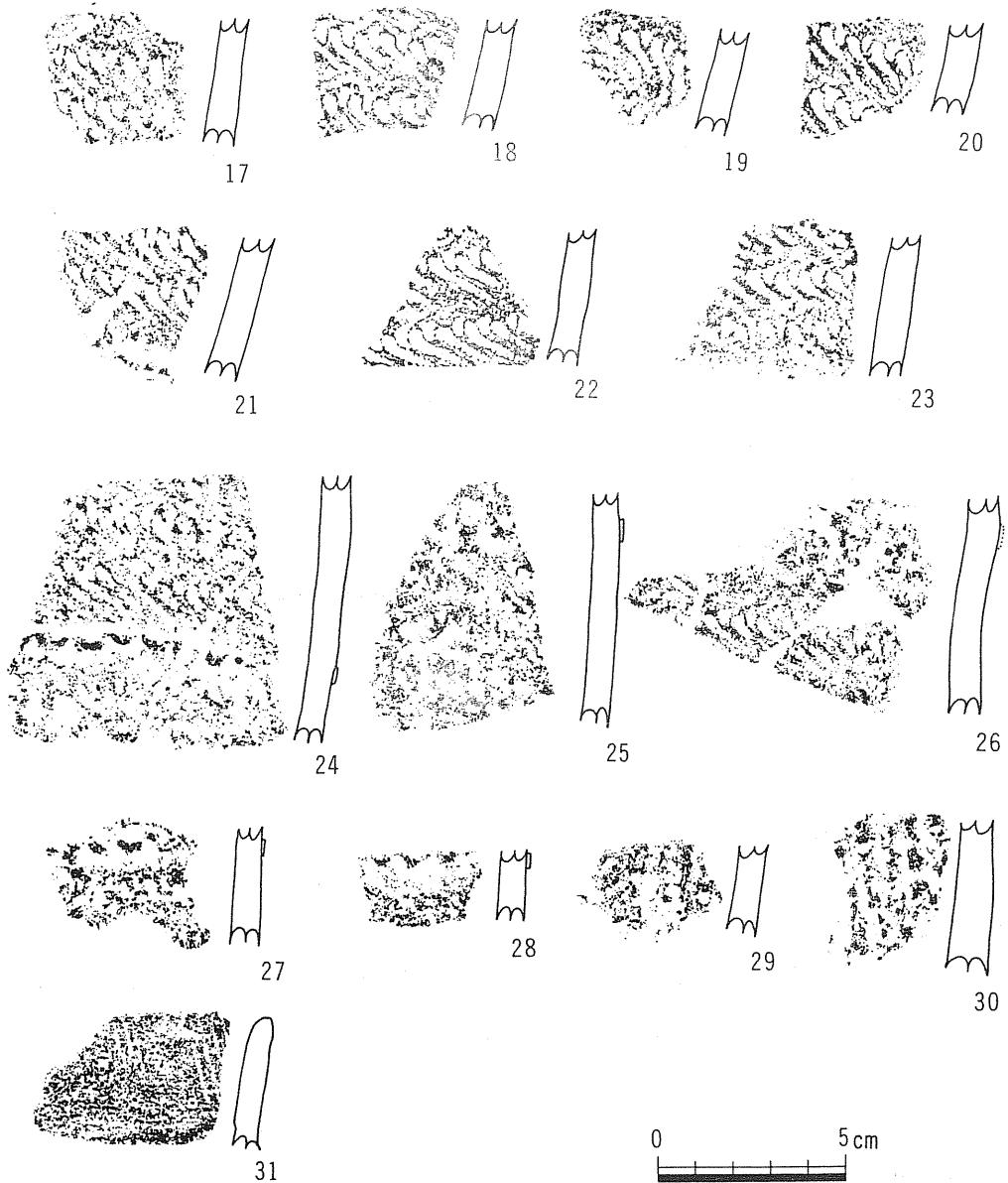
第3図1は深鉢形土器胴部下半の破片で、ヘラ状工具先端の押引きによる連結爪形状の文様が付されている。外面黄褐色、内面褐色で、胎土にはやや大きめの砂粒が若干含まれ、纖維の混入はみられない。焼成はあまり良くない。

2も深鉢形土器胴部下半の破片で、外面には貝殻条痕文がやや右傾して施されており、煤状炭化物が付着し、内外面とも褐色～黄褐色を呈する。胎土は砂粒を含み、纖維の混入はみられない。焼成は普通である。

第3図3～16、第4図17～28は同一個体の破片であるが、これ以上接合しない。器形は大形の深鉢形土器である。3～7は口縁部で直立ないしほんのわずかに外反し、平坦な口縁を呈する。口唇部には上から指頭状のもの、側面からヘラ状工具で凹凸にされ、小波状を呈し、その直下から羽

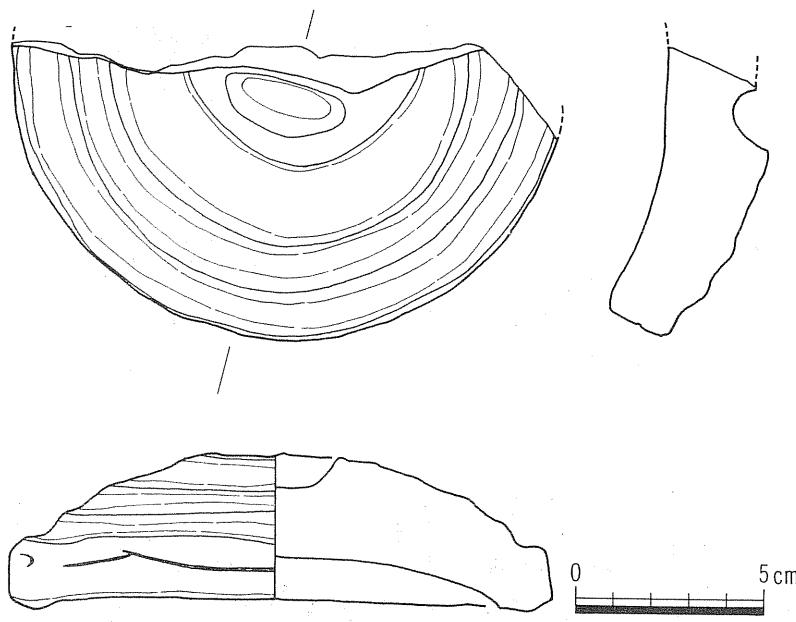
第3図 出土土器(1)





第4図 出土土器(2)

状縄文が横位に施される。縄文原体はLRとRLであるが、前者の方がやや細く回転の際結束部から下の方に力が入っているため、この部分ではループ文風に見える。第4図24~28は胴部上半の破片である。横に1条の粘土紐が貼付され、上方からと左側方から棒状あるいはヘラ状工具で刻目を施し、全体として波状となっている。この土器の外面は褐色、内面は暗い黄橙色で、外面ほぼ全



第5図 出土土器(3)

体に煤状炭化物が付着している。胎土に纖維は含まれず、焼成は良好。底部は平底かと思われる。

第4図29, 30は内外面赤褐色を呈する深鉢形土器体部破片で、文様は縄文かと思われるが、焼成が悪く、器面が荒れてはっきりしない。胎土には砂粒を多く

含み、纖維は混入しない。

第4図31は口縁部がやや肥厚して外反する深鉢形土器の口縁部破片である。頸部でややくびれて薄くなる。器面が荒れて明確ではないが、右傾する条痕文が地文かと思われる。内外面とも暗褐色を呈し、両面ともに煤状炭化物が付着している。

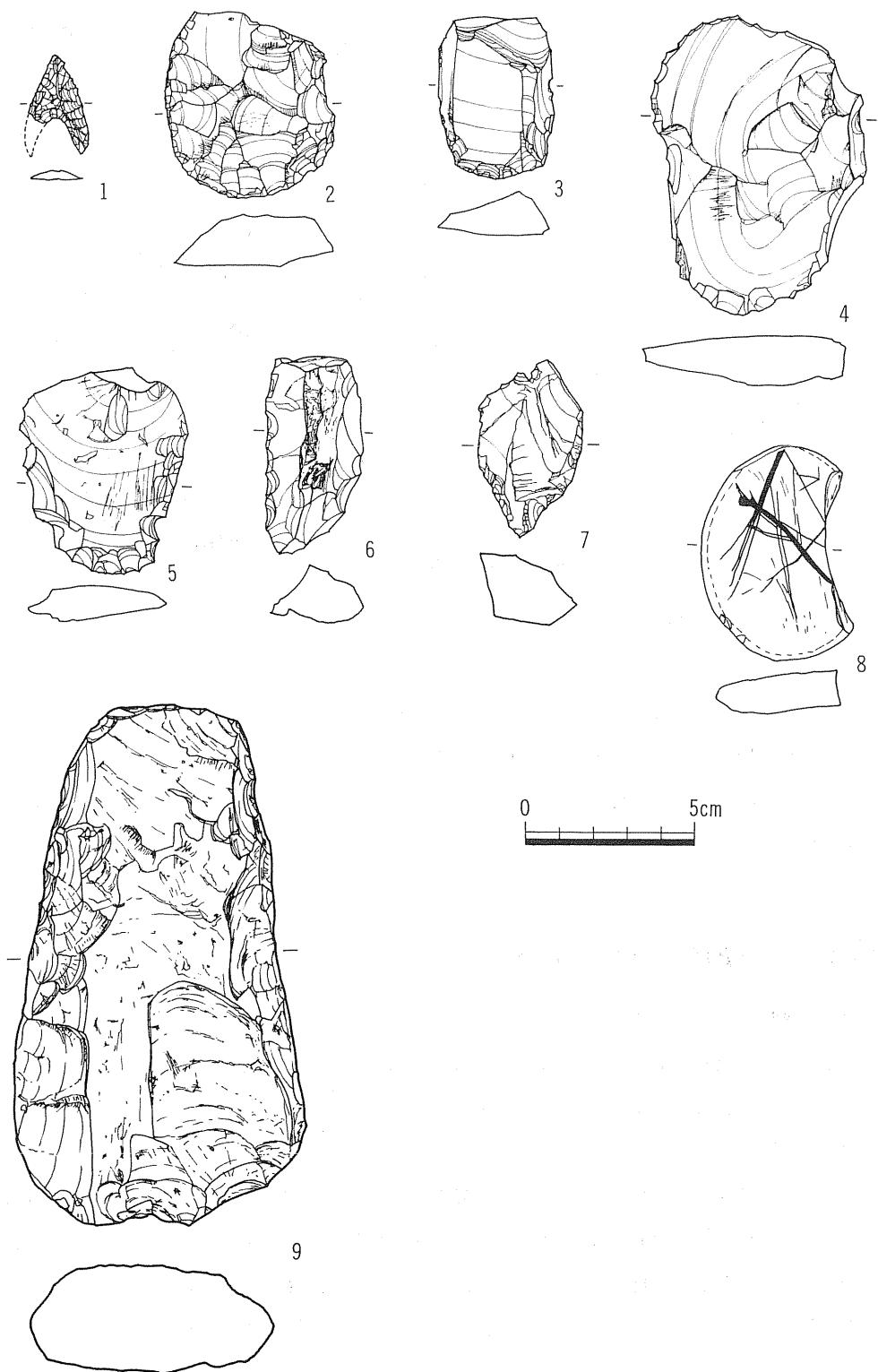
第5図の蓋は調査区南東端斜面から出土した。胎土に砂粒をほとんど含まず、内外面ともに灰白色を呈し、非常に軽い。つまみ部分は半分程失われているが、半円状の凹みが2つあるものと思われる。この蓋の時期については全く不明。

2. 石 器

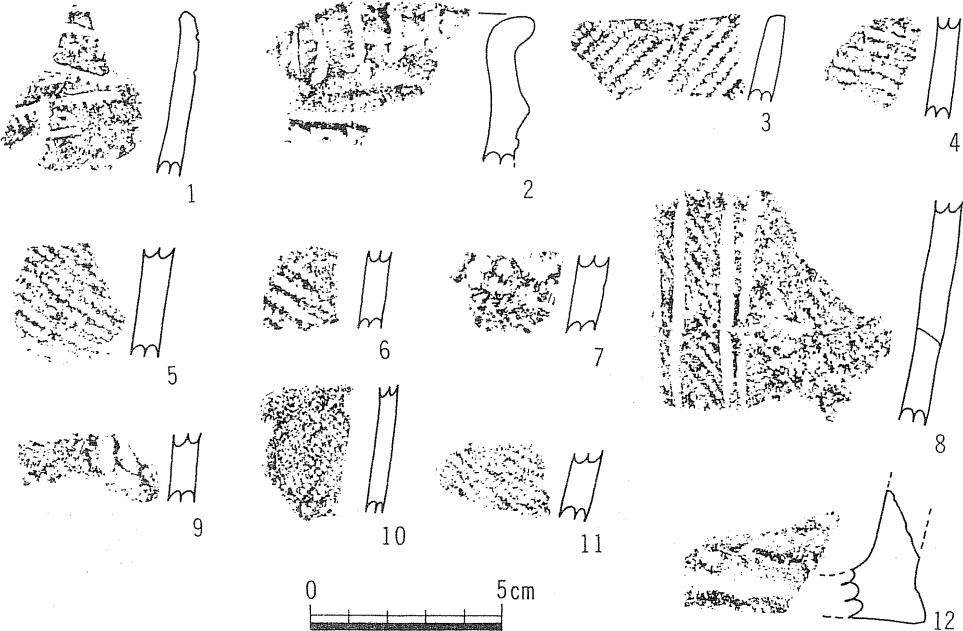
今回の発掘調査で出土した石器の総数は8点で、石製品が1、剝片も約30片と少なかった。

第6図1. 凹み部分の大きな無茎石鏃でていねいな作りである。

2. ラウンドスクレイパー的な石器で、主要剥離面への二次加工は施されていない。
3. エンドスクレイパー様の石器で、先端部の主要剥離面となす角度は80度前後である。打面及び打瘤部分は折り取られている。
4. 横長、大形の剝片の縁辺部に二次加工を小さく施している。
5. わりと雑な背面からの加撃で二次加工を施し、搔器様に仕上げている。



第6図 出土石器



第7図 No.2, No.6 遺跡採集土器

6, 7. ぶ厚い剥片の縁辺及び先端部にわずかの加工を加えたもの。

8. 楕円形のやや軟かい石を両面から擦って平らにしたもので、不定方向に大小の擦痕がある。

9. 遺跡北端部で試掘した際に出土したもので、大形の打製石斧。先端部は3～4回の加撃で断面が尖る。

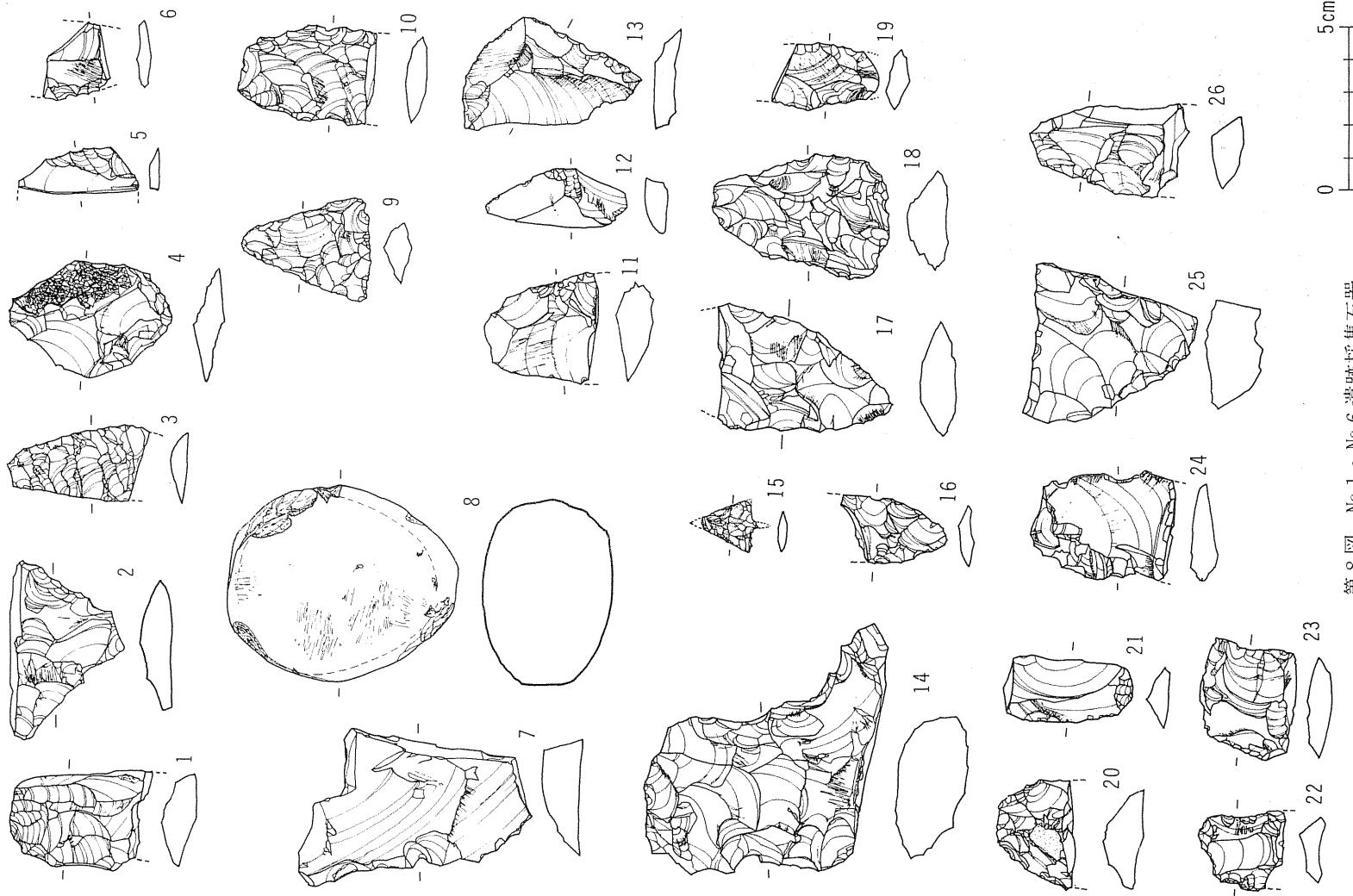
第2節 周辺遺跡とその採集遺物

1. No.1 遺跡

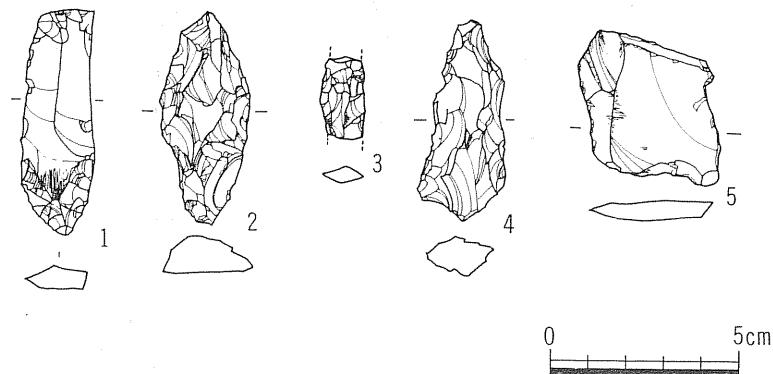
湯元遺跡対岸の南西斜面にわずかの剥片が散布する。第8図1, 2がその石器で、いずれもわずかの二次加工のあるもの。遺跡の時期は不明。

2. No.2 遺跡

湯元遺跡と大鳥谷沢をはさんで南東対岸の最低位段丘に存在する。遺跡の範囲は1,000m前後かと思われる。遺物が濃く分布する部分は表土～地山上面にかけブルドーザにより削除されているが、遺構そのものは残存する可能性がある。第7図2～12が採集された土器で、全て縄文時代中期中葉に位置する。石器は第8図3～8で、8は表裏面ともに縦横方向の擦痕のあるハンマーストーンかと思われる。



第8図 №.1～№.6遺跡採集石器



第9図 No.7 遺跡採集石器

3. No.3 遺跡

湯元遺跡の南南東約500m、皆瀬川の最低位段丘上にある遺跡で、現在秋田県地熱開発センターになっている。遺跡の面積はほぼ3,000m²前後。採集した遺物は第8図9～13の石器のみ。時期は不明。

4. No.4 遺跡

湯元遺跡の750m北方の対岸、湯元遺跡と同位段丘上にある遺跡。かつては皆瀬村立小安小学校湯元分校のあったところである。小さな剝片と土器細片を採集したが、時期は不明。

5. No.5 遺跡

No.4のさらに北北西500m、No.4遺跡と同位面にある遺跡。採集したのは第8図14の石器だけ。時期不明であるが、あるいはすぐ北のNo.6遺跡と連続する可能性もある。

6. No.6 遺跡

No.4、No.5遺跡と同位面。皆瀬川が形成した小安渓谷とすぐ東側の山との間(約100m)にある遺跡。遺物の散布範囲はNo.1～No.7遺跡の中では最も広く、遺跡面積も5,000m²前後と思われる。第7図1が採集された土器。貝殻圧痕文と沈線による文様が施された土器で、縄文時代早期後葉のものである。外面黒褐色で、焼成は良好。ほんのわずかに煤状炭化物が付着する。内面は褐色で、胎土は砂粒を多く含み、纖維は混入しない。石器は第8図15～26。15の石鏸はの有茎で、両面のほぼ全面にアスファルトが付着している。時期は縄文時代早期後半。

7. No.7 遺跡

No.5遺跡の西側対岸、西方からのがた馬の鞍部状の張り出し上にある遺跡。この部分のみでは約200m²しかなく、より規模の大きな遺跡の一部分とも思われる。採集された石器は第9図1～9。時期は不明。

第1表 湯元遺跡出土石器計測一覧表

○(使用痕)としたものは剥片に調整痕ないし使用痕のあるもの。

○幅は残存部の最大値をとった。

No.	挿図番号	出土地区名	石 器 名	材 質	長さ(cm)	幅 (cm)	加 工
1	6—1	L I 48	石 鏃	頁 岩	3.0	1.7	両 面
2	6—2	J E 51	搔 器	頁 岩	5.5	4.9	片 面
3	6—3	J F 51	搔 器	流 紋 岩	3.8	3.3	片 面
4	6—4	L E 48	搔 器	頁 岩	8.8	6.3	片 面
5	6—5	K E 52	搔 器	頁 岩	6.1	5.0	片 面
6	6—6	J E 51	(使 用 痕)	頁 岩	5.8	2.9	片 面
7	6—7	L I 48	(使 用 痕)	頁 岩	5.2	3.1	片 面
8	6—9	試掘地点	打 製 石 斧	流 紋 岩	15.2	8.6	片 面
9	6—8	J E 51	石 製 品	泥 岩	6.4	3.9	両 面

第2表 No.1～No.6 遺跡採集石器計測一覧表

※ 確立した名称を持つ石器と思われるが、その名称のはっきりしないもの

No.	挿図番号	採集遺跡No.	石 器 名	材 質	長さ(cm)	幅 (cm)	加 工
1	8—1	No. 1	搔 器?	頁 岩	4.3	3.2	片 面
2	8—2	No. 1	(使 用 痕)	流 紋 岩	3.5	5.5	半 両 面
3	8—3	No. 2	石 匙?	頁 岩	4.1	2.3	半 両 面
4	8—4	No. 2	搔 器	頁 岩	5.0	3.5	片 面
5	8—8	No. 2	たたき石	泥 岩	7.0	6.0	
6	8—5	No. 2	(使 用 痕)	頁 岩	3.8	1.4	両 面
7	8—6	No. 2	(使 用 痕)	頁 岩	2.2	2.2	両 面
8	8—7	No. 2	(使 用 痕)	頁 岩	7.2	4.4	片 面
9	8—9	No. 3	石 篦	頁 岩	4.0	3.2	両 面
10	8—10	No. 3	石 篦	頁 岩	4.1	2.9	両 面
11	8—11	No. 3	石 篦	流 紋 岩	3.5	3.4	両 面
12	8—12	No. 3	(使 用 痕)	頁 岩	4.4	1.9	片 両
13	8—13	No. 3	(使 用 痕)	頁 岩	5.7	3.3	半 両 面
14	8—14	No. 5	(使 用 痕)	頁 岩	6.8	7.7	両 面
15	8—15	No. 6	石 鏃	頁 岩	1.8	1.6	両 面
16	8—16	No. 6	石 槍	頁 岩	3.4	2.0	両 面
17	8—17	No. 6	石 槍	流 紋 岩	5.2	3.8	両 面
18	8—19	No. 6	石 槍	頁 岩	3.3	2.1	両 面
19	8—18	No. 6	※不 明	流 紋 岩	5.6	3.8	両 面
20	8—20	No. 6	石 篦	頁 岩	2.4	3.5	半 両 面
21	8—21	No. 6	搔 器	頁 岩	3.7	2.0	半 両 面
22	8—22	No. 6	(使 用 痕)	流 紋 岩	2.7	2.3	両 面
23	8—23	No. 6	(使 用 痕)	頁 岩	3.0	3.4	半 両 面
24	8—24	No. 6	(使 用 痕)	流 紋 岩	4.4	3.2	片 面
25	8—25	No. 6	※不 明	流 紋 岩	5.0	4.9	両 面
26	8—26	No. 6	※不 明	頁 岩	4.5	2.6	両 面
27	9—1	No. 7	※不 明	頁 岩	6.0	1.9	両 面
28	9—2	No. 7	石 槍	頁 岩	5.7	2.4	半 両 面
29	9—3	No. 7	※不 明	頁 岩	2.2	1.2	両 面
30	9—4	No. 7	石 槍	頁 岩	5.3	2.3	両 面
31	9—5	No. 7	(使 用 痕)	頁 岩	3.7	3.6	片 面

第5章　ま　　と　　め

今回の湯元遺跡の発掘調査では 550m²を調査した。その結果、遺構の検出は全くなく、縄文時代前期前葉を中心とする土器、石器を若干得たにすぎない。これらの遺物の出土地点はほとんどが調査区南東部及びその斜面に限られ、遺跡の中心地そのものは調査区の北及び北西側にあったものと考えられる。このことは北西端部でほんのわずか残っていた非破壊地区を試掘してみた結果でも明らかであった。このように、遺跡の発見が遅れたとはい、遺跡の中心部が未調査のまま消滅してしまったことは遺憾であった。

出土土器の中でわずか 2 片であるが、縄文時代早期後葉に位置づけられるものがある。第 3 図 1, 2 がそれで、当方では雄勝郡雄勝町岩井堂第 4 洞穴第 11 層出土のものに類似する。また、湯元遺跡からではないが、No. 6 遺跡からも類似の土器が採集されており、今後、皆瀬川上流域における縄文時代早期から前期にかけての諸様相を明らかにする一つの手がかりを得たといえる。

(1) 山下孫継、雄勝町教育委員会「岩井堂洞窟」第 4 洞穴第 8 次発掘調査報告書、昭和 54 年 5 月
10 日



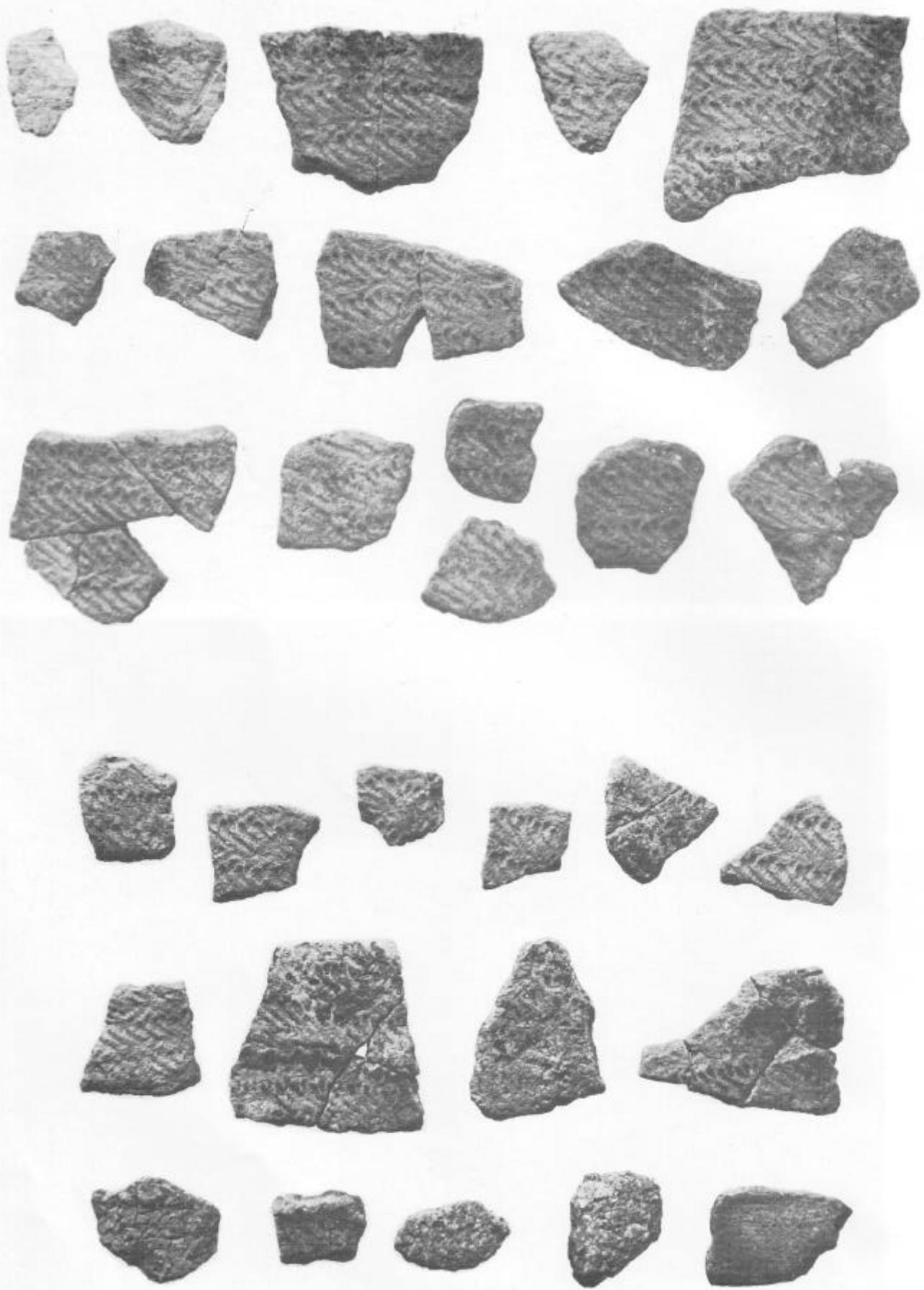
図版1 上 遺跡遠景（東▶西）
下 遺跡全景（東▶西）



図版2 上 遺跡近景（西▶東）
下 地層断面（東▶西）



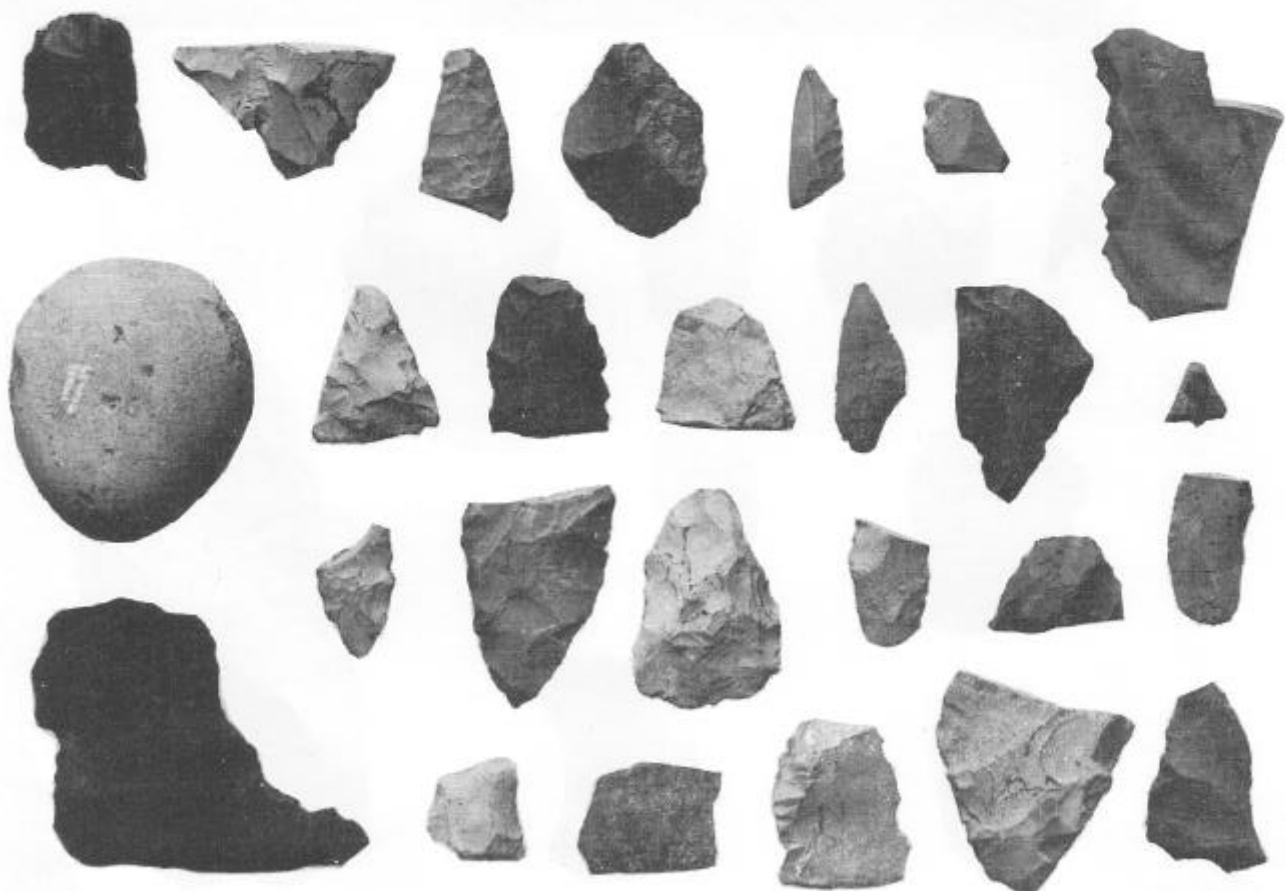
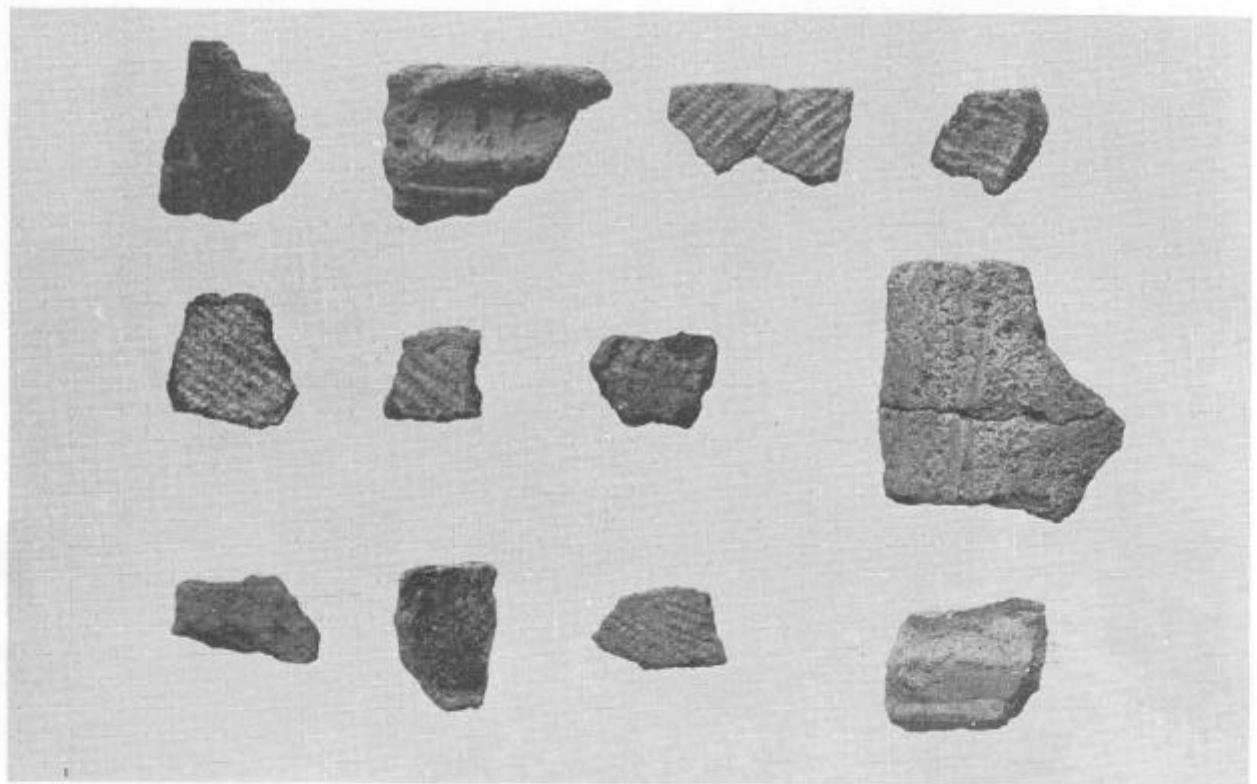
図版3 上 発掘風景
下 発掘状況（北▶南）



図版4 湯元遺跡出土土器



図版 5 上 湯元遺跡出土土器
下 湯元遺跡出土石器



図版 6 上 No. 1 ~ No. 7 遺跡採集土器
下 No. 1 ~ No. 6 遺跡採集石器



図版 7 No. 7 遺跡採集石器